

Abhayākara Gupta の Haribhadra 批判

磯 田 熙 文

『二万五千頌般若経』を“八現観”の行道体系によって、簡潔な経句・法数など——従って諸種の解釈の余地を含む——をもってまとめあげた『Abhisamayālamkāra (現観莊嚴論) (AA)』(D No. 3786, P No. 5184)には、周知の如く、直接・間接に多くの注釈が造られたが¹⁾、就中、Haribhadra (8世紀)はAAの解釈と経文の釈の中に従来の経論の諸教説を踏まえた総合的な立場から独自の注釈内容をもって肉づけした注解を残している。

彼のAAに関する著作として伝えられているものは、

(1) 『八千頌般若注解・Ālokā (Ḥgrel-chen)』D No. 3791, P No. 5189²⁾。

(2) 『AA 注解・Sphuṭārthā (Ḥgrel-chen)』D No. 3793, P No. 5190³⁾。

(3) 『宝徳蔵般若注解』D No. 3992, P No. 5190。

(4) 『二万五千頌般若』D No. 3790, P No. 5188⁴⁾。の四書であるが、(2)がこの人の立場を簡潔に最もよく示したものと考えられ、チベットに伝えられてからは、代表的な般若解釈の一つとして重んぜられた。

しかるに、一方、Haribhadra の解釈を無視し事実上、批判的な立場をとる注釈者として、Ratnākaraśānti (Śānti-pa, 10世紀末・11世紀)がいる⁵⁾。更に、Abhayākara Gupta (11世紀末~12世紀初)の注解は、Haribhadra を名指しで批判している点で、我々の注意を引く。

彼はベンガルに栄えた Pāla 王朝の Rāmapāla 王の時代に活躍した顕密兼修の学僧として伝えられている⁶⁾。その著作のうち、顕教(波羅蜜理趣)に含められるものは、実質的には、(1)『八千頌般若注解・Marmakaumudī』D No. 3805, P No. 5202。(2)『Munimatālamkāra』D No. 3903, P No. 5299。の二書であり、かつ、共にAAに関わる大部の書であるが、(1)には17回⁷⁾、(2)には15回⁸⁾ Haribhadra の名がほとんどの場合、否定的な意味で引かれている。今は、Abhayākara Gupta が、如何なる点を批判の対象としているか、『Munimata.』にも『Marma.』にも Haribhadra 説が不合理・不適當として指摘されているうちの三例の内容を追って、その一端を明らかにしたい。

(一) Haribhadra は、『Ālokā』に、AA 第二章・道智性(mārgajñatā)の“無所

得行相の廻向作意”に配する『八千頌般若』本文：「……六波羅蜜に相應する善根，仏徳の成就と相應する善根，(+)力・(四)無所畏の波羅蜜と相應する善根，神通の波羅蜜と相應する善根，完全智の波羅蜜 (parijñā-pāramitā) と相應する，誓願の波羅蜜と相應する，一切智智と相應する善根……」を十波羅蜜に対応させ，“完全智の波羅蜜”を智波羅蜜に当て，更に，「智波羅蜜は最勝であるのに，何故，無分別ではないのか，というならば，(答えて云う) 智波羅蜜は無分別智の後得の智であり，その智によって証得を分別し，自己の法の受用を享受する。そして，他を成熟させる。まさにそれは両(作用)共に無分別中にはないから，従って，智波羅蜜は無分別ではない。」と加えている⁹⁾。この一文は『中辺分別論』の安慧釈からの引用であることが指摘されているが¹⁰⁾，Haribhadra 自身は何の comment も付していない。無分別後得智を十波羅蜜中の後四波羅蜜に対応させ，智波羅蜜が「受法樂・及成熟衆生」であることは，すでに『攝大乘論』の入因果修差別勝相品第五に述べられている¹¹⁾。

Abhayākara は、『Marma.』において，この対応『八千頌』経文に対して何ら注解を加えずに，第一章一切相智性 (sarvākārajñatā) の地資糧の項に関連して，「Haribhadra が，無分別智の後得の智波羅蜜を分別性のものと云うそれは不合理である，先に無辺の分別を断じて，証得の頂位に達した段階において清淨世間のいかなる分別がありうる(かどうか)の疑惑はない¹²⁾」と述べて，『究竟一乘宝性論』より，

「前の行願力に基づき，一切分別を遠離しているから，彼は更に有身者達の成熟のために何ら努力を払わない// 74//

無効用に，彼はこの様に常に無礙の慧を持ち，世界の虚空の涯まで，有情達の利益を行なう// 76//

これらの証得を得た菩薩は，世間において有情を渡らしめることについては，如来と同等である// 77//¹³⁾

の三偈を引用している。また，『Munimata.』の第一章には，十波羅蜜を解説する際に，「智波羅蜜は大乘の密意が如何なるものであり，また(それが)如何なる語であるかを完全に知ることである」と述べてから，「Haribhadra が智波羅蜜を無分別ではないと云うのは非常に輕卒(無思慮) (śin tu bab tshal) である，般若波羅蜜を自性とし，(二十二種のうちの) 第十四(発心)等の七発心の本性が智波羅蜜であって，分別は諸菩薩の煩惱に他ならないから，その(第十地)ではあらゆる場合に分別の現行することはまったくあり得ない，究極的には一切の習気が滅す

るからである。従って出世間智の後得清淨の何処に世間の分別智があろうか。清淨とは何かといえ、所取・能取に対する執着のないことである……」と説明を加えている¹⁴⁾。

この「智波羅蜜が無分別ではない」という句は引用であり、Haribhadra 自身が何ら註を付していない、また、二十二種発心に関連して述べてもいないこと、Abhayākara が、“二十二種の発心は、まさに大乘・果を伴った菩薩道、般若波羅蜜、八現観”であるとの立場を高揚し¹⁵⁾、智波羅蜜は十地の菩薩、第十四(第二十)発心に、仏の後得智の位は第二十二発心に対応せしめられることなどからすれば¹⁶⁾、彼がHaribhadra の不用意を指摘することを理解しうる。

(二) AA の第五章・頂現観 (mūrdhābhisamaya) には、“見道”について；

「布施などに関して、まさに各々に、また、それら(三十六)の相互の結びつき、それは、一刹那のものであり、この(頂の)見道において、(苦法)忍に摂せられるものである// 22//」¹⁷⁾

と述べられ、Haribhadra がこれに対応させて引く『八千頌般若』の本文には、「……須菩提よ、菩薩摩訶薩が無上正等菩提を現等覺したいと欲する場合には、般若波羅蜜を行すべし。何故か。須菩提よ、何故なら、般若波羅蜜を行ずる菩薩摩訶薩には布施波羅蜜は(その)修習が円満する。……般若波羅蜜を行ずる菩薩には一切の六波羅蜜は(その)修習が円満する。一切の善巧方便は修習が円満する。かの菩薩摩訶薩が般若波羅蜜を行ずる場合には如何なる魔業が生じても、すべてこれらの生じたものをまさに彼は知る、知って(それを)追い払う。」と説かれている¹⁸⁾。Haribhadra は、『Ālokā』に、対応の『二万五千頌般若』を引用しつつ、「この様に戒を護り、乃至、般若を修習して、各々六波羅蜜の円満の摂受が経に随って説かれるべきである。それ故に、次の様に云われる：布施等の六波羅蜜が、各々一つ一つの布施等において、相互に全波羅蜜を摂している、それは、この頂現観において、一刹那のものであり、苦法智忍の所摂であり、三輪清淨として顕現し、三十六相として生ずる見通として、定められるべきである。」と解説する¹⁹⁾。

これに対して、Abhayākara は、『Marma』に「……自身とは別の五をもって、相互に一つ一つに摂せられ現起するのは、ここでの頂現観の見道の道における法智忍の所摂であり、一刹那のものであり、十六(刹那)ではない、『二万五千頌般若』に、「布施波羅蜜において」とより、「般若波羅蜜に到るまで住し」等と説かれる。従って、苦法智忍の所摂であるという Haribhadra には大きな損害がある。

ここでは法智忍の階位の欲界の煩惱の何らかの区別ではない、その諸習気は已に断ぜられているからである。」と云う²⁰⁾。同じ内容の批判が、『Munimata.』にも見られる：「Haribhadra が苦法智忍の所撰であるというのは大迷乱である。」、「六波羅蜜は道諦の所撰であって、苦諦のそれではない。……この(頂現観)においては法智忍の(刹那)でもない、欲界の煩惱の諸行相は先に断じているから、上界の煩惱の能対治の自性である類智忍の自性であることが適合する。」と述べ²¹⁾、Haribhadra の苦法智忍説に対して、道類智忍説を主張する。『Sphaṭārthā』の注解者、Dharmakīrtiśrī²²⁾は当然のことであるが、Ratnakīrti も前の苦法智忍説を採る²³⁾。ちなみに、Tsoñ-kha-pa は、AA 本偈からしても道類智忍でなければならぬ必然性はなく、Āryavimuktisena (汝 Abhayākara が依処とする) がこれによって(欲・色・無色)三界の(四)分別・百八煩惱を断ずる旨述べており²⁴⁾、それと矛盾すること、また、この見道が自身、欲界を因(nimitta)としていることなどを述べて、Abhayākara の説は非常に不合理(ches mi rigs)であると再反論している²⁵⁾。

(三) AA の第八章・法身現等覺(dharmakāyābhisambodha)に、仏身の数に関して、Haribhadra が四身説を採って AA を解説していることはよく知られている²⁶⁾。『Sphaṭārthā』には；

「牟尼・仏・世尊の自性身は、智を自性とし、出世間であり、法界を自性とするが故に無漏、諸垢の客塵性の故に一切種に、本性的に遠離せる特相の清浄を得たる念処等の本性的な自性、不生を自性とするものがそれであり、不改作の意味によって、出世間道によって得られるのであって、作られるのではないから、如幻の識による一切法の証得をもって得られる。

他の三身は、勝義上は法性を自性とし、眞実世俗として顕現し、信解に依じて顕われ、仏・菩薩・声聞等の行境として建立されるのである。

何故なら、遠離は、遠離せるものと不分離であると認められる//

という理からして、その(自性身)と不分離であるが、(他の三身は)別個に建立されるのである。」²⁷⁾

等といわれる。

これに対して、Abhayākara は、『Munimata.』の第三章に、「それぞれの経にも三身のみが詳説されている。『大乘莊嚴経論』(菩提品)にも(次の様に)説かれている；

三身によって仏身が撰せられると知るべきである。三身によって依持と自利利他とが説

かれる(から)である// 65//²⁸⁾

Ārya Nāgārjuna-pāda も(『三身讚』に),

一でもなく, 多でもない, 自利利他の大円満具足の基体である/²⁹⁾

等とまさに三身を讚歎する。Āryavimuktasena-pāda も, 「法身は三種と知るべきである, 自性と受用と化(の三身)である……」³⁰⁾と詳しく明らかになさる。従って(Haribhadra が『Sphuṭārthā』に云う様に)「出世間の菩提分等, 如幻不二智を自性とするのが, 法身で, 第四である」³¹⁾, ということは何処にも立てられない, その建立は Haribhadra の勝手からであって捨てられるべきである。また「この様に, 依持たる法性と(所依の無漏)諸法は世俗上それから生じたものとその自性によってと云われるから, 何でも諸法の身が法身であるという第四身は, 波羅蜜理趣において定んで説かれることはない。真言理趣には, 所化の差別の面から法性が邪に随い建立されることにより(四身が)定んで説かれる。実際には, その(真言)においても邪たるものではない。まさにそれ故にある場合には法身の語で自性身を表わし, ある場合には自性身の語で法身(を表わす)。……仏身は五の自性ありと五身も説かれる。この五身を信解する者達は私の著作である『Ām-nāyamañjarī], 『Abhayapaddhati』の註解から明らかに知るべきである。ここでは論ずる関わりがないから止める。以上の故に, 主題とならず, 不適であり別の面から説かれる四身の建立が Haribhadra の(それ)であると確定する。」³²⁾と, 以上の様な文脈をもって, Haribhadra の四身説が否定される。『Marma.』においても同様である³³⁾。この四身説に対してかなりの批判があったことは, Tson kha pa が, 「Ācārya (Haribhadra) のこの説には, 前述の様に, 印度でもチベットでもかなり多くの人が善くないと云うが, 私はこの説を適切であると考える。」³⁴⁾と述べていることから伺い知られる。

今は, Haribhadra の四身説の意図を知るよしもないが, 菩提心説の真言理趣における展開同様に, 波羅蜜と真言の両理趣の関わりを明らかにする上で見逃しえない課題である³⁵⁾。

以上, Abhayākāra の Haribhadra 批判の一端を追って見たが, それらは必ずしも Haribhadra の AA 解釈と本質的に立場を異にするものとは思われない。むしろ, 発心論などの例を挙げるまでもなく³⁶⁾, Haribhadra に依存するものである。Abhayākāra 自身が問題であると考えた点を批判的に指摘し, その際に, Āryavimuktasena を権証として引くことが見られるものの³⁷⁾, その解釈の基調は同じ流れの中にあると捉えることができる³⁸⁾。

- 1) 『Ārya-Vimuktasena: Abhisamayāmkāra-Vṛtti (I)』文化 39, 1・2, pp. 2-4. 2) Tucci ed. (G. O. S. vol. 62) 1932; Wogihara ed, 1932-35 (rep. 1973); Vaidya ed. (B. S. T. No. 4) 1960. 3) H. Amano; A Study on the Abhisamayālamkārikā-śāstra-Vṛtti, 1975; Rāmasaṅkartipāthī, Abhisamayālaṅkāravṛttiḥ sphuṭārḥā, (B. 1. T. 2) 1977. 4) Dutt ed. (G. O. S. No. 28) 1934 (chap. I); T. Kimura ed. II, 1-5). 5) AA に関する、『二万五千頌般若注解・Śuddhimatī』(D No. 3801, P No. 5199) と『八千頌般若注解・Sārottamā』(D No. 3803, P No. 5200) のうち、後者のサンスクリットテキストが出版された。(第一章に(103 fols 中 21 fols の) 欠落があり、他の欠葉を含めると 3 割の欠落になるが、我々にとって非常に貴重であることは云うまでもない) P. S. Jaini ed. Sāratamā, 1979 Patna. 6) 『Munimatālamkāra』について、印仏研 29, 2, pp. 885-4. 7) D fol 2b⁶, 9a⁷, 13a⁸, 24a¹, 49a¹, 54b⁷, 55a⁶, 61b³⁻⁴, 83a²⁻³, 84b⁴, 109b⁷, 123a⁷, 124b⁵, 157b⁵, 163a³, 180b², 197b⁷; P fol. 3a⁸, 10b⁸, 15b¹, 27b², 56b³, 63a³, 63b³, 70a⁷, 94a⁵, 96a², 125a⁴, 140b⁴⁻⁵, 142a⁶, 178b⁶, 184b³, 204a², 222a⁷. 8) D fol. 98a², 170a⁷, 178a⁶, 180a⁴, 182a⁴, 183b⁶, 188a⁵, 198b⁵, 208a¹, 209b⁴, 210b³, 217b⁴, 219a¹, 230b³, 240b⁷; P fol. 106b⁶, 218a⁷⁻⁸, 230b⁶, 234a³, 236a³, 238a⁶, 244a³, 258a⁶, 271a⁸, 273b⁴, 275a, 285a⁷, 287a, 305a, 321a⁷. 9) Tucci 本 p. 227, ll. 12-23, Wogihara 本 p. 330, ll. 4-14, Vaidya 本 386, ll. 8-16. 10) P No. 5299, fol. 106b⁷. Yamaguchi ed. Madhyāntavibhāgaṭīkā. de Sshiramati, p97; Pandeya ed., Madhyāntavibhāga-śāstra, p. 74, ll. 10-13. 11) 宇井博士校訂本, pp. 85-86, なお、『撰大乘論研究』p. 640, 686; 上田博士『仏教思想史研究』pp. 222-25 参照. 12) D fol. 61 b³⁻⁴, P fol. 70a⁷. 13) Johnston ed. Ratnagotravibhāga-mahāyānottaratantra-śāstra, p. 52. 14) D fol. 98a¹⁻⁴, P fol. 106b⁵-107a³. 15) 『Munimatālamkāra』について pp. 884-3. 16) 『Marma.』D fol. 13a³⁻⁴, P fol. 15b². cf. 『Cittotpāda. について』印仏研 19, 1, pp. 74-76. 17) 『ekaikasyaiva dānadau teṣāṃ yaḥ saṃgraho mithaḥ/ sa ekakṣaṇīkaḥ kṣānti-saṃgrhīto 'tra dr̥k-pathe// 22』(Amano ed. p. 230). 18) Wogihara 本 p. 885, l. 28-p. 886, l. 11. 19) Wogihara 本 p. 887, ll. 2-7. 20) D fol 180b²⁻⁶, P fol. 203b⁸-204a³. 21) D fol. 209b4.....7. 22) D No. 2794, fol. 233b⁷, P No. 5192, fol. 264b⁶. 23) D No. 3799, fol. 245a²; P No. 5197, fol. 290b⁵⁻⁶. 24) D No. 3787, fol. 174b¹⁻²; P No. 5185, fol. 205b³⁻⁴. 25) 東北蔵外 No. 5412(B), P No. 6150, fols. 259b⁴-260a³. 26) 長尾博士『喇嘛教教理の概要』『東方学報京都』14, 4 天野民『ハリバドラの仏身論』宗教研究 179 号, S. 39, 等参照. 27) Amano, ed. p. 263. 28) Lévi ed. Mahāyānasūtrālamkāra, IX. 65, p. 46. 29) D No. 1123, fol. 70b³; P No. 2015, fol. 81b³. 30) D No. 3787, fol. 191b⁷; P No. 5185. fol. 226a⁶. 31) See, Amano ed.p. 265. 32) D fols. 217b¹⁻⁴, 218 b²-219a¹; P fols 285a²⁻⁷, 286b⁴-287a⁶. 33) D fol. 197b⁷; P fol. 222a⁷. 34) P fol. 308a⁸-b¹. 35) 羽田野先生; Tāntric Buddhism における人間存在, 『東北大・文・研究年報』9, p. 292 参照. 36) 註 16) 『Cittotpāda について』参照. 37) 例えは, 『Marma.』D fol. 84b³⁻⁴; P fol. 96a¹⁻². 38) Cf. Lessing and Wayman ed. & tr. Mkhas grub rje's Fundamentals of the Buddhist Tantras, 1968, pp. 96-99. もっとも Abhayākara は, Haribhadra を 『śabdārthavijñaptivādin である Śāntirakṣita とその説の随順者』の一人であるとし, 『世俗上, 外なく不二であり, 青等は自証現量を本性とし, 勝義無自性であるという主張は不合理である』という (『Marma.』D fol. 24¹⁻², P fol. 27b²⁻³).

(東北大学助教授)